

# 一人暮らしの高齢者を地域で支える

甲田 孝子



# はじめに

認定介護福祉士モデル研修を受講した中で、「人は役割を持って社会関係の中で生きる」という学びがとても印象的であった。施設の中での利用者としての支援だけでなく、地域の中で生活する高齢者の支援も重要であると考えます。認定介護福祉士として、地域住民の力を引き出し、高めていく事を目的とし実施に至った事例を紹介する。

# 事例の概要

Aさん

- ・年齢・性別・要介護度：87歳・男性 要介護度2
- ・家族形態：独居。親近で姪がいるが遠方にいるためあまり交流がない。
- ・主な病気：貧血のみ。
- ・現在利用中のサービス：通所介護、訪問介護、福祉用具貸与
- ・利用者の希望：家の前の畑で野菜を作ってデイサービスや近所に分けてみんなの喜ぶ顔が見たい。姪からは、叔父が一人暮らしなので心配なことは多いが出来る限り自宅での生活を続けてほしい。
- ・主な生活歴：現在住んでいる場所で生まれ育ち、山仕事で生計をたてていた。結婚し子供を一人授かるが、長男は28年前に、妻は25年前に亡くなっている。姉の子と養子縁組をしている。

# 利用者の課題

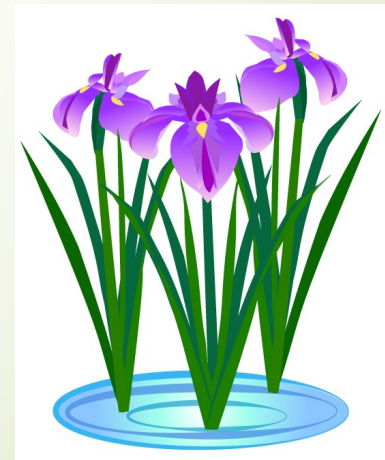
Aさんは、以前は地域の行事やデイサービスで行われる行事にも積極的に参加していた。近所に住む同級生の友人は高齢者クラブの会長をしており、その友人と共に地域を引っ張るリーダー的存在であった。また、若い人たちの相談役でもあり、さまざまな人の相談を受けてきた。しかし、長い入院生活をきっかけに近所の付き合いも減ってしまった。行事への参加を促そうと声をかけても「調子が悪いからやめておく」と参加に消極的な言葉が多く聞かれた。地域の住民はだんだんと「体調が良くないようだからそっとしておこう」という認識に変わり、人との関わりが希薄になってきている。

## 課題解決のためのサービス①

Aさんの住む地域は山間地に位置していて高齢化率は約5割となっており、ほとんどの世帯が高齢者のみで構成されている。地域住民の関係は濃密で、声の掛け合いや助け合いの輪ができています。また、介護予防に対する取り組みが充実しており、元気な高齢者が多い。この山間地の中にあるデイサービスは地域の中の「そうだん処」として、住民のさまざまな相談を受けており、地域のニーズにも耳を傾けている。地域住民との交流を盛んにおこなっており、ここで顔見知りになる人も多い。そんな地域の中で、公的なサービス以外に人のつながりで支えられていることがこの地域の良さではないかと考える。この地域の特性をいかし、今までも訪問をしている民生委員や関係の良好な隣人、以前から深い関わりのある同級生である友人の声掛けなどのインフォーマルサービスを定期的に行い、Aさんの安心安全を地域で支えていけたらどうかと考えた。

## 課題解決のためのサービス②

また、地域住民主体で行っている介護予防体操に参加すれば、月1回ではあるが、地域の人と顔を合わせる機会を持つことができる。さらにこの介護予防体操の補助として参加している地域包括支援センターのスタッフとも話ができれば、知っている人と会うことで、Aさんの気持ちが前向きになれるのではないかと考える。





## カンファレンスの開催①

デイサービスでAさんへの支援について、地域住民の方を呼んで話し合いをおこなった。Aさんが地域の一員として活動できることを目標としたうえで、地域住民でAさんを支えたいという提案をおこなった。そのために、地域のみなさんに声掛けと見守り、介護予防へのお誘いをお願いすることとした。声掛けに関しては、こころよく了承してくださった。家の都合などで行かれない時もあるが1日1回顔を出し、Aさんの様子を見ることは可能であるとのこと。民生委員にも協力してもらい、見守りが自分自身の負担にならないようにしたいとのこと。介護予防への声掛けに関しては地域住民で行い、体操に行く際は、地域住民が送迎をすること。地域包括支援センターとデイサービスの職員の方からも声掛けをしてもらいたいと要望があった。

## カンファレンスの開催②

カンファレンスをもとに再度デイサービスの職員で話し合い、地域住民の協力について、頻度を決めてしまうと負担に感じてしまうのではないかという点が懸念されたため、まずは可能な範囲でお願いすることとした。デイサービスに来ている日と訪問介護でヘルパーが入る日は外し、その他の曜日について地域住民に協力をお願いすることとした。

約1か月Aさんへの支援を行い、モニタリングをおこなった。同級生の友人は週に1度顔を出してくれているが、何もなくても一目見るだけで互いに安心できるようである。Aさんは「本当にありがたい」と友人に感謝しているようであった。いろいろな人が顔を出してくれることで、Aさんは元気になってきたようだ。介護予防体操には参加しなかったが、「誘いの声がかかって嬉しい。近所の人たちに気にしてもらえるだけで元気が出る。世話になっているみんなのために頑張りたい」と意欲が出てきている。



## 考察

Aさんは、骨折による長い入院生活で要介護者となったが、それまでは地域住民の一員として先頭に立ってきた人である。Aさんの支援にあたっては、この地域の特性である助け合いの輪をインフォーマルサービスとして活用し、地域の中で困っている人をみんなで協力して支えていく取り組みができるのではないかと考えた。しかし、その支援が地域住民の負担になるようでは本末転倒である。地域住民が主体的に取り組むことが重要である。この地域では住民が集まり顔を合わせると「〇〇さん最近見ないけどどうしてるかな」「今度寄って声かけてくるよ」と互いを気遣う会話が聞こえてくる。そこから地域の支え合いが始まるのではないか。

今回のケースでは、このような地域の力を使うことによってAさんの気持ち動いてきたのではないかと推測する。今後もインフォーマルサービスに重点を置き、Aさんが自宅での生活が続けられるように、地域住民と連携をとって支援していきたいと考えている。

# 認定介護福祉士として実践したポイント

Aさんが自宅で生活を続けていくために、必要な介護サービスを受けていただくことはもちろんであるが、それ以上にこの地域の力を引き出してAさんを支えることを、地域住民と一緒におこないたいと強く感じた。専門職や行政との連携は重要だが、インフォーマルサービスに重点を置いて、いかに地域でAさんを支えられるか、経過と結果を出したいと思い、今回取り組ませていただいた。見守りと声掛けという小さな支援かもしれないが、話し合いを重ね、地域住民の心を動かして地域の仲間に対して意識が向いたことはよかったと思う。今後も認定介護福祉士としての意識を持ち続けて職場や地域を動かしていきたい。